新連載

証言！

日本人の見た南京陥落

阿羅健一 ●評論家

はじめに

南京攻略戦に向った日本軍は、昭和十二年十二月十三日、南京城に突入した。城外での戦闘に比べれば、城内での戦闘はあっけなかったが、この日から翌年一月にかけて、南京では日本軍による残虐行為があったといわれた。昭和十二年十二月から昭和十三年にかけて、米英の新聞・雑誌、及び中国・華僑の新聞で報道されたものである。日本兵による殺人・強姦・掠奪などが数百件あり、二万人の捕虜処刑もあったらしいと伝えられた。

これは、戦後、南京と東京の軍事裁判で改めて取りあげられ、南京虐殺事件として、日本人にも知られるようになった。しかし、この時伝えられた内容は、昭和十二、三年当時報道されたものとは似ても似つかぬもので、南京の軍事裁判では数十万人の大虐殺があったとされ、第六師団の師団長であった谷中将がその責任者として処刑された。また、東京裁判では、十万ないし二十万人の大虐殺があったとされ、そのため、中支那方面軍の司令官であった松井石根大将が絞死刑になった。

朝香宮鳩彦王殿下

松井石根大将

長谷川清第三艦隊長官

昭和十二、三年当時、日本ではそれらの報道は殆どなく、国際上、公式にとりあげられることもなかったことから、そのままになっていた。また、戦後、戦争裁判で取りあげられ、しかも占領下だったことから、真相は闇に葬られることになった。その後、南京事件は、政治的に利用されたため、ますます真相から遠ざかった。

独立後、南京虐殺事件の真相をきわめようと、いろいろな試みが行われるようになった。一次資料の発掘や当時南京にいた人たちの証言の収集などである。その他、考えられることは大方なされた。それにもかかわらず、真相が明らかになったとはいいきれない。その理由の一つは、政治的な立場からの一次資料の曲解や偽証などがあるからである。

事件があったとされてからほぼ五十年。当時、南京にいた日本人でもっとも若かった二十歳の青年もすでに七十歳である。南京事件は歴史上の出来事になろうとしている。しかし、その時南京にいた人達こそ南京で何がおこなわれたか知っているはずである。このことは間違いない。五十年の年月は、事実を風化させる一方、恩しゅうをこえ事実を述べさせようとしている。今こそ偽りのない証言が、南京事件とは何であるか物語ってくれるのではなかろうか。

そう考えて、当時南京にいた人達のリストを作り、一人一人にあたり、当時の様子をたずねた。すでに五十年前のことであり、忘れていたり、間違って記憶していたりすることもあろう。しかし、証言が積み重ねられることによって、その穴がうめられ、訂正され、南京の姿が浮びあがり、事件とはどんなものだったか明らかになるにちがいない。

当時、南京を攻略したのは松井石根大将を軍司令官とする中支那方面軍であった。中支那方面軍の隷下には朝香宮鳩彦中将の上海派遣軍と、柳川平助中将の第十軍があった。

陸軍だけでなく、海軍も南京攻略戦に参加した。海軍は長谷川清中将を司令官とする第三艦隊が上海にあり、第三艦隊のうち、近藤英次郎少将の第十一戦隊と三竝大佐の第二連合航空隊が陸軍の作戦を助けた。第十一戦隊は揚子江を遡上して、また第二連合航空隊は空から参加した。

南京虐殺事件があったとすれば、まずこれら現地軍が知っていたであろう。現地軍のなかでも、軍司令部の司令官、参謀たちは軍の動きを鳥瞰的に把握できたはずである。また、師団の師団長、参謀長、旅団長、連隊長など幹部も知ることが出来たであろう。

現地軍が知っていたとすれば、中央に報告されたかもしれない。

軍が南京に突入すると同時に、日本の外交官も南京入りした。南京領事館員は日中間の戦いが本格化した昭和十二年八月十六日に引揚げ、上海の大使館にいた。この領事館員が軍と共に南京に入ったのである。既に中国の行政関係者や第三国の外交官はいなかったが、日本の領事館員は外国権益の保護にあた

電脳日本の歴史研究会 www.history.jp

り、また、南京にあった第三国人による国際安全委員会からの要望、抗議の受け入れにあたった。これら領事館員も様々なことを見ていたと思われる。

領事館員が把握したことは、上海の大使館に報告され、さらに上海の大使館を通して本省に報告されていたであろう。

軍・外務省関係のほか、十二月十三日に南京に入った人に従軍記者がいる。同盟通信、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、報知新聞などの記者である。通信社、全国紙のほかに、地方の新聞社の記者達も入った、南京攻略戦に参加した連隊は、日本各地の主要都市で編成されたが、その都市にある新聞社が、従軍記者を派遣したのである。一県一紙時代になる以前であり、富山の富士井連隊のように一つの連隊に少なくとも四紙の地元記者が従軍することもあった。また、福岡日日新聞は十名ほどの記者をおくっている。これら通信社、新聞社の派遣は、記者の他にカメラマン、無線技師、連絡員から成っていた。同盟通信、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の四社はニュース映画の製作もしており、撮影のため、ニュース映画カメラマンも南京に入った。また、記録映画製作のため東宝のカメラマンも入った。

従軍記者の他に従軍作家、従軍画家などがいた。新聞社や雑誌社が派遣していたもので、林芙美子、大宅壮一、西条八十など二十名にものぼっている。

南京に入ったこれら報道関係者の総計は二百名にも及んだ。

さらにあげれば、国会議員、僧侶、俳優などの慰問団、防空研究のための軍関係者、内務省関係者、学者、外務省の撮影班等もいた。

南京陥落後、日ならずして南京に入ったこれらの人を捜し、存命中の方々にあたった。但し、一般兵士だけは除いた。南京に入った人の中で、もっとも多かったのは一般兵士であり、膨大な数にのぼる。現在でも生存者は数千人にのぼるであろう。この人達すべての証言を収録するのは繁雑になるし、その一部を載せると、恣意的とみられてしまうおそれがある。また、この人々の証言は、戦後、各部隊の歴史が編纂された時、そこに収録されている。それ故、兵士達の証言は割愛した。

上海派遣軍参謀●大西一大尉の証言

上海派遣軍参謀として南京攻略戦に参加した大西一大尉の証言である。

上海派遣軍は、昭和十二年八月十五日編組され、軍司令官には松井大将が親補された。十一月になり、上海派遣軍を助けるため、柳川中将を軍司令官とする第十軍が編成された。そして、上海派遣軍と第十軍を統一指揮するために中支那方面軍が編成され、松井大将が司令官を兼ねた。十二月七日、南京攻略の直前、上海派遣軍の司令官に朝香宮中将がなり、松井大将の兼任が解かれた。これら軍は、翌年の二月まで江南に作戦を展開し、その任務を終えると二月十五日に廃止になった。

南京攻略戦とそれに続く南京占領を考える時、それらを全般的に、しかも細部にわたって知りえたのは、上海派遣軍なり中支那方面軍にいた人たちであろうと思われる。特に上海派遣軍は、八月から中国軍と戦い、作戦の全般に通暁していた。南京占領後も、城内の中山北路にある首都飯店に軍司令部を置き、

二月まで南京にとどまった。第十軍が杭州攻略のため十二月十九日に反転し、また、中支那方面軍も江南全体を把握するため、十二月二十二日、上海に戻ったことを考えれば、上海派遣軍が南京について一番の情報をつかんでいたことがわかる。

上海派遣軍には軍司令官のほか、参謀長飯沼守少将、参謀副長上村利道大佐、それに参謀が十五名いた。この中で健在なのは大西参謀一人である。

大西一氏は明治三十五年十一月生まれ、陸士三十六期。陸大を卒業して一年後の昭和十年に参謀本部の支那課に配属された。昭和十二年八月、上海派遣軍の参謀になった。大尉で三十四歳の時である。

昭和十三年二月、上海派遣軍がなくなると、今度は中支那派遣軍の南京特務機関長としてそのまま南京に残った。一年後の昭和十四年、軍務局軍務課員として東京に戻った。

大西一大尉

十五年の八月から軍務課の支那班長をつとめたあと十六年六月には高級課員となり二十年二月まで軍務課にいた。六年間という長い期間である。この間、最高戦争指導会議の監事補佐をつとめた。当時、外務省の監事補佐は門脇季光氏、内閣の監事補佐は迫水久常氏であった。昭和二十年二月に第十三方面軍高級参謀に任命された。ソ連に行っていたため赴任が遅れたが、これが軍の最後の奉公になる。終戦は、第十三方面軍の司令部がある名古屋でむかえている。大佐であった。

上海派遣軍には参謀が十五人おり、三課に分れていた。一課は作戦、二課は情報、三課は後方担当である。

一課の課長は西原大佐、以下六人の参謀がいた。

二課の課長は長勇中佐で、長中佐の下に本郷忠夫少佐、御厨正幸少佐、大西一大尉がいた。第二課の仕事は中国の情報収集で、どの師団がどこに配置されているかについて調べることも必要であった。中国軍は軍閥の領袖による軍の集合体だけに、師団ごとの強弱がはっきりしていた。中国軍の配置の状況を知ることはきわめて重要だったのである。

当然ながら、第二課は中国をよく知る者が配属された。大西大尉はそれまで二年間、参謀本部支那課の兵要地誌班にいたが、その時の班長が長勇中佐であった。共に軍の支那関係者である。昭和十一年十二月になって、長班長は漢口に駐在武官として行き、大西氏は残った。しかし、大西大尉も翌十二年八月には上海の大使館付武官補佐官として支那に行くことになった。内示があり、準備していた。

しかし、七月に蘆溝橋で起きた戦火は八月には上海に飛び火し、上海派遣軍が編組された。武官補佐官どころではなくなり、派遣軍参謀としてそのまま上海に行くことになった。長中佐が漢口駐在武官から来た。本郷少佐も長沙駐在研究員からやって来た。日中全面対決で漢口の駐在武官、長沙駐在研究員が廃止されたからである。

第三課は補充、通信が主な任務で、ここが捕虜についても担当する。寺垣中佐が課長、櫛田、榊原、北野、佐々木の各参謀がおり、榊原少佐が主に捕虜の担当をしていた。

長勇第三課長のことからうかがった。

——昭和六十年三月号の「偕行」に、松井大将の専属副官であった角良晴大尉の証言があり、それによりますと、長参謀が虐殺を命

東京都立立川図書館
電脳日本の歴史研究会
www.historyai.jp

令したとありますが

「私は長参謀の下にいましたが、長参謀が命令を出したということは見たことも聞いたこともありません。

角証言については、長参謀が命令したという第六師団は第十軍下で、上海派遣軍ではありません。上海派遣軍が第十軍の師団に命令することはありえないことです。また、情報担当の長参謀が命令するというのもおかしい話です。

長参謀は中支那方面軍の参謀も兼任したという人もいるが、私は聞いたことはありません」

——田中隆吉中将も、戦後、「裁かれる歴史」の中で長参謀が虐殺を命令したと書いてますが

「田中隆吉氏については、こういう話があります。

田中氏が兵務局長の時、私は軍務局の軍務課にいまして、その時、閻錫山をなんとかしようという問題があり、そちらに強い田中兵務局長が閻錫山に会いに行くことになりました。

結局、田中兵務局長は閻錫山本人とは会えずに、使いの者と会って話をまとめたといって帰って来ました。まとまった内容は、日本が閻錫山の軍隊に小銃を与えるということです。ところが与える小銃の量というものが、日本の一年間の製造分に匹敵する量でした。これを聞いた私は、一体どうしたかと思って田中兵務局長にくいさがってとことんせました。

この様なこともあり、当時から氏のいうことは信用できませんでした。

戦後の東京裁判の証言も考えると、田中氏のいう長参謀の話は信じられません」

——鈴木明氏の「〝南京大虐殺〟のまぼろし」によれば、第十三師団の山田梅二旅団長に長参謀の虐殺命令があったといいますが

「南京攻略が間近になった時、軍司令部は湯水鎮にあり、窪地の石造小屋を司令部にしていました。その時、私は句容にいましたが、いよいよ南京攻撃というので十一日に呼びもどされました。

この湯水鎮にいた時のことですが、朝起きると、まわりの山に中国兵がたくさんあらわれました。司令部では大あわてで、そこらにいるすべての兵を集めて攻撃しました。我々参謀も万一の場合宮様をお守りしなくては、と部屋のまわりをぐるりととりかこみました。本来なら副官の仕事ですが、その時は私達も死ぬつもりでいました。やがて敦賀の連隊長が大隊を指揮して車で来て事無きをえました。

第十三師団が捕虜をつかまえた時というのは、上海派遣軍の司令官に朝香宮殿下を迎えたばかりで、長参謀も相当気を使っていました。そういう時ですから、いわれるような命令を出すはずがありません。

長参謀はいわゆる右翼で、上海では頭山満翁から贈られた陣羽織を着ていました。右翼の子分も上海までついて来て、長参謀は、僕に、彼らを自由に使うようにとよこしたことがあります。そんな人ですから、宮様の前ではできるはずがありません」

——人間としてどんな人ですか

「長参謀とは参謀本部支那課と上海派遣軍の二度一緒に仕事をやりました。激しい人でしたが、支那に対しては理解ある人でした。無理をいう人ではありません。

二課にいる人は中国をよく知ってる人ばかりで支那に同情してました」

中島師団長への注意

大西参謀が南京に入ったのは十二月十三日午後である。中山北路の首都飯店あたりではまだ戦闘中であった。上海派遣軍司令部が中山北路にある首都飯店に入ったのは数日後である。朝香宮中将もお入りになった。翌年二月に派遣軍司令部が任務をおえてなくなるまでここにとどまる。占領時のさまざまな命令はすべてこの軍司令部から出された。

——第十六師団の中島（今朝吾）師団長の日記に「捕虜はせぬ方針なれば」とあり、これが捕虜虐殺の証拠だともいわれてますが

「これは銃器を取り上げ、釈放せい、ということです。中国兵は全国各地から集っていますが、自分の国ですから歩いて帰れます」

——軍の命令ということはありませんか

「このような命令を出していません」

——捕虜の扱いは第三課ですね

「そうです。

寺垣中佐が課長で、おとなしい人でした。担当は榊原少佐で、この人はもっとおとなしい人です。軍の中でも一番おとなしい人でした。ここがそのような命令を出すことはありません。

榊原参謀はついこの間まで健在で『偕行』の「証言による『南京戦史』のため、一緒に偕行社にも行きました。その時は奥さんがよくない、と早めに帰りましたが、奥さんより先に亡くなってしまいました」

——中島第十六師団長もいろいろいわれていますが、どんな人ですか

「当時中島師団長は中将、私は大尉。とても話をしたりするような間柄ではありません。直接には殆ど存じ上げていません」

——第十六師団は上海派遣軍に属していた訳ですから何らかの接触は

「私個人としては、師団長が指輪をしているのを見て、いい感じを持たなかった記憶があります。中島師団長はフランスに留学しており、そのような習慣がついたものでしょうが、戦場で指輪とは、と思いました」

——松井大将が中島師団長の統帥を非難されたといわれてますが本当でしょうか

「中島師団長は中国の家は焼いても構わんといったらしい。もちろん、松井大将の前でいった訳ではないでしょうが、それを聞いた松井大将が私に第十六師団に行ってくるようにといわれた。だから松井大将が中島師団長の統帥について注意をうながしたことは確かだ。私は十六師団に行くことは行ったが、大尉の身分で師団長に直接いえる訳もなく、十六師団に上陸以来よく知っておる参謀がいたのでその人に伝えた」

——普通、将官が将官にいうことはないでしょうが、松井大将が直々に注意なさらなかったのでしょうか

「軍司令官が師団長に直接いうのはよほど重大なことです」

——中島中将といえば、最後は軍司令官までつとめ、日本陸軍の代表の一人でもある訳ですが

「……。

私と同期の者が中島連隊長のもとにいた時、陸大を受けようとしたが許してくれないと慣慨していた。連隊長の許可がないと受験出来ない訳です。中島師団長は人の好き嫌いが激しかったらしい。

私には中島中将の悪い話しか入ってこなかった」

——占領後、十六師団が南京警備にあたり

電脳日本の歴史研究会
www.history.gr.jp

ますが

「南京陥落後、第十軍が引き揚げ、南京には上海派遣軍が残った。上海派遣軍で南京攻略戦に参加したのは、第九師団と第十三師団と第十六師団だ。このうち、第十三師団は既に揚子江を渡っている。

警備司令官を誰にするかということが派遣軍の中で話になった。第九師団長か第十六師団長だ。中島さんを毛嫌いする人が多くて、私が第九師団長にお願いしようといい、そう決った。そこで第九師団に警備を任せることになり、松井大将の命令で私が光華門の外にある第九師団に行った。ところが第九師団の参謀長（中川大佐）が、上海では自分たちの戦場掃除もしないで南京攻略に向った、上海の戦場掃除をしたいので御免していただきたいという。それで代りに第十六師団が南京を警備することになった」

——第十六師団の旅団長佐々木到一少将が南京城内の警備司令官になりますが

「知っている通り、佐々木少将は随一の支那通といわれていた。

但し酒を飲むと乱れた」

——中支那方面軍の参謀副長だった武藤章大佐の回想録「比島から巣鴨へ」に次の様な箇所があります

〃松井大将は作戦中も随分無理と思われる位支那人の立場を尊重された。この松井大将の態度は某軍司令官や某師団長の如き作戦本位に考える人々から抗議され、南京の宿舎で大議論される声を隣室から聞いたこともあった〃

この場面にいらっしゃいましたか

「そのようなことは全然知りませんでした。私は武藤軍務局長に非常にかわいがられまして、軍務局には六年も任えました。しかし、武藤さんからその話を聞いたことはありません。

武藤さんは方面軍が出来た時、参謀副長になり、松井さんと一緒に居られたので、このことは間違いないでしょう」

——某司令官とは柳川中将、某師団長とは中島中将とおもいますが

「師団長は中島中将に間違いない。軍司令官は柳川中将しかいない。

松井さんと大激論は疑問に思います。若干の意見の齟齬はあったかも知れませんが、大激論とは一寸考えられません」

——十三日以降の南京の様子はどうでした

「十三日はまだ戦闘が続いていまして、首都飯店付近までしか行けませんでした。

挹江門に行った時は両側が死体でいっぱいだった。

十七日から十八日に下関に行ったが、揚子江には相当死体があった。土手ではなく、江の中です。掃蕩によるものでしょう。この死体は年末まであった」

——挹江門の死体はいつ頃まであったものでしょうか

「全軍の慰霊祭（十八日）の後まであった。或いは二十日過ぎまであったかもしれない。

その後、特務機関主催で挹江門で中国軍慰霊祭をやりました。その時には挹江門内外は奇麗になっていました。私が主催でしたが中国側市政府関係、日本官憲、一般中国人も参列し、四、五百名は集りました」

——上海派遣軍の中で虐殺があったという話はおきませんでしたか

「話題になったことはない。

第二課も南京に入ってからは、軍紀、風紀の取締りで城内を廻っていました。私も車で廻った」

——何も見てませんか

「一度強姦を見た」

——白昼ですか

「そうです。すぐ捕えた。十六師団の兵隊だったので十六師団に渡した。強姦は私が見た以外にも何件かあった。

最初は慰安所を作るのに反対だったが、こういうことがあるので作ることになった。そういうことは第三課がやった」

——その他、暴行、略奪など見てませんか

「見たことがない。

特務機関長として、その後一年間南京にいた。この間、南京はもちろん、蕪湖、太平、江寧、句容、鎮江、金壇、丹陽、揚州、滁県を二回ずつ廻ったが、虐殺を見たことも聞いたこともない」

軍中央の視察

日本軍が南京に向っている時から占領した後まで、軍中央部から現地に、何人かが派遣されている。攻略中の河辺作戦課長、多田参謀次長、陥落後の阿南人事局長、本間参謀本部第二部長などがよく知られている。

戦後になり、軍中央部からの南京視察があったことは、軍中央部が南京事件について何らかを知っていたのではないかとの憶測を呼んでいる。

一般に、中央からの派遣は、南京攻略戦にかぎらずよくあることである。例えば奉天大会戦後、参謀総長の山県有朋が前線におもむいたのは有名である。しかし、南京占領後の中央からの派遣は次のようにはっきりしたものである。

昭和十二年十二月十二日、日本軍の一部は城壁を占領し、最後の攻防が行われていた。この時、南京から四十キロ程上流の揚子江で日本軍の飛行機が米砲艦パネー号を攻撃し、沈没させるという事件がおきた。いわゆるパネー号事件である。日本は陳謝すると共に、十五日には参謀本部第二部のアメリカ班班長西義章中佐が実情調査のため南京に向った。入城式前後調査にあたり、二十日に南京から上海に飛行機で戻り、二十二日帰京した。二十三日、西中佐は柴山軍務課長と共にグルー駐日アメリカ大使を訪問し、調査結果を説明している。

この事件に対し、アメリカは、陳謝、賠償金の支払、今後の米権益に対する保証の三点を要求した。日本はすべてをのみ、この問題は解決した。

しかし、陳謝についてはすぐに済んだが、賠償金についてはアメリカが見積った上、請求することになり、もう一つの、将来にわたる権益保護に対しても、今後の問題であることから完全な、問題解決は将来にもちこされることになった。

そうするうちに、一月十四日、南京のアメリカ領事館のアリソン領事が、入場式が終り一段落しているのに日本兵の略奪が続いている、と日本領事館に抗議した。これをうけて、一月十七日、グルー大使は広田外相に、南京、杭州、その他で日本軍は米国権益を侵している、これは前の約束に反していると正式に抗議した。

これに対し、日本では一月十五日、上海と南京の軍当局に、アメリカ用地に立ち入らないようにと命令を出した。また南京の本郷少佐がアリソン領事に、本国から指示があった、今後おきないようにする、と連絡した。さらに、一月二十八日、本間雅晴参謀本部第二部長が実情調査のため上海に向った。これ

軍脳日本の歴史研究会
www.historyjapan.jp

には下志津飛行学校教官だった広田豊中佐が随行した。一行は二月初旬、南京、杭州を調査し、二月四日上海に戻った。広田中佐はそのまま上海派遣軍付として残り、三月二日には中支那派遣軍参謀となった。日本政府は外国権益事項処理のため、何か所かに専任武官を派遣することに決め、その一人として広田中佐を常駐させたのである。

この調査結果に基づいて、二月十二日、吉沢アメリカ局長がドゥーマン参事官の来訪を求め回答文を渡した。この中で

一、軍中央部より高級将校を現地に派遣し命令の徹底を図り

二、現地主要各地に、外国権益事項処理のため、あらたに専任武官を配置することとし、既に一部これが実現を見

三、憲兵の増加配置を企画している

と述べている。これによりアメリカ権益問題は解決した。

この他、南京陥落後、防空研究のため、東部防衛、中部防衛などから参謀が南京に向った。東部防衛参謀古閑健大佐は、防衛委員会の調査団長として東大、早大の教授らと南京に行った。また、宮本清一中部防衛参謀は、各県の防空担当者と共に南京に視察に行った。

以上が当時から明らかになっている軍中央からの派遣とその内容である。

――本郷参謀がアメリカ大使館に、略奪について釈明に行ってますが

「第二課の参謀の中では本郷参謀が最も古く、そこで外国との交渉は自然と本郷少佐がやることになった。南京に行ってからも、用件のくわしい内容は知らないが本郷少佐が行ったのは覚えている。

米英の権益を尊重せよと言うことは九月の上海の頃からやかましくいわれていた。第三師団の蘇州河の戦いの時、河の左の米英の工場から機関銃がこっちを向いている。それでも米英の権益ということで手を出せずくやしい思いをしたこともある」

――西中佐が南京に行ったことを知っていますか

「覚えていません。

西氏は私が軍務局へ帰った時、参謀本部謀略課に居られたと思いますが、もちろん来られたとしても何の用件か分りません」

――本間第二部長が二月上旬、南京に行ってますが、

「存じていません」

――アメリカ権益保護のため行ったと当時の記録にありますが、虐殺事件のためという人もいます

「もしお出でになったとすれば、第三国の権益関係と思います」

――広田中佐が上海派遣軍に派遣されていますが

「ええ、覚えています。

ただし、私とは年の開きもあったので詳しく話をした記憶はありません」

――古閑大佐と会ったことは

「当時は全然存じあげていません」

昭和十三年ごろ

昭和十三年二月、上海派遣軍、第十軍は廃止になり、中支那方面軍が残り、新しい任務のため人事が一新された。名前も中支那派遣軍と変った。大西参謀はそのまま中支那派遣軍の特務機関長として南京に残った。

昭和十三年頃の南京見聞記を読むと、O少佐あるいは若い特務機関長、といった名前が

頻繁に出てくる。大西氏のことである。当初、大西氏は大尉だったため南京特務機関長補佐官長と名乗っていた。上海、杭州など他の特務機関長が大佐クラスだったためである。一か月後の三月に少佐に昇進し、この時初めて南京特務機関長を名乗った。南京とまわりの九県が管轄であった。各県に五人から十人ほどの特務班員を置いて、これら全体の指揮をとった。この特務班員は陸軍省が雇ってよこしたもので、いわゆる軍属である。大西氏は主に南京にいて中国側との折衝の任にあたった。

特務機関長時代、ある日、中国人が、日本軍に家を壊されている、と訴えて来た。一緒に行くと、南京駅のそばで、その中国人の家とまわりの家がとり壊されている。とり壊している兵隊に聞くと、谷田勇大佐の命令だという。すぐやめさせ、谷田大佐に会いに行った。谷田大佐は大西氏が陸大の学生の時の工兵の教官。その時は中支那派遣軍の後方参謀であった。聞くと、上海からどんどん軍需品を送ってくる、南京駅周辺に積まねばならないのでまわりの家をとりつぶしている、という。これでは作戦上仕方ないと思い、そこですぐに城外にバラックを二十軒ばかり作り、ここに中国人を住ませた。

このように、南京特務機関長は、中国の様々な問題に対する日本側の窓口である。南京市民の実態を最もよく知り得る立場にあった。

――二月から一年間、特務機関長として南京に残るわけですね

「参謀本部の支那関係者は支那に行くことになっていた。こういう時期でもあるので、そのまま特務機関長として支那に残ることになった」

――南京攻略戦での日本兵の死体は、すべて日本人が荼毘に付すなりしたのでしょうか

「全部日本人の手でやりました。

上海戦では日本兵の死体は残ったでしょうが、南京戦では残った死体は殆どありません」

――中国兵の埋葬は日本軍が指揮したものですか

「中国兵の死体は中国人が埋葬しました。埋葬するのに日本軍に連絡するということはありません。

逆に軍が紅卍字会に、どこそこの死体を埋葬するようにと頼んだことがある」

――紅卍字会をどぞんじですか

「赤いマークをつけて、よくやっていた」

――自治委員会も埋葬活動をしたと記録にありますが

「自治委員会も働いたが、死体の埋葬はそんなにやらなかったと思います。紅卍字会が中心にやっていました。

それから、何とかいう団体が埋葬したというが……」

――崇善堂ですか

「そうそう。

当時、全然名前を聞いたことはなかったし知らなかった。それが戦後、東京裁判で、すごい活動をしたといっている。

全然知らない」

――昭和十三年に入り、南京の郊外は安全だったのでしょうか

「ほぼ安全だった」

――日本人も来て商売しますね

「日本人のことは総領事館がやっていた。

我々特務機関の仕事は支那側の行政を援助することであった。

総領事館には福田篤泰君が一人でおって、粕谷（孝夫）官補があとで来た。特務機関は交通銀行の二階を使っていたが、その一階があいていたので、総領事館が開く前はそこを総領事館として使っていた」

電脳日本の歴史研究会
www.history.gr.jp

——南京事件を知ったのは戦後ですか

「そうです。

松井大将がそのことで起訴されたと聞き、私は証人になると申しました。松井大将が帰ってからも南京特務機関長として残り、南京のことはよく知っていたからです。しかし、その時、私は第十三方面軍のことで戦犯に指定されていましたので、戦犯が証人になるのは、との話があってとりやめになりました」

——昭和十二年から昭和十三年にかけての南京は大西さんがもっともくわしいのですか

「そうだと思います。

十数年前、朝日新聞に〝中国の旅〟が連載された時、あまりに当時の日本軍と違うので、抗議にいって本多（勝一）記者を詰問したことがあります。

南京事件は戦争裁判でとりあげられたが、その後、話題になるようなことはなかった。ところが、〝中国の旅〟の頃から今度は日本人があったといいだした。その時、真実を知っている自分こそ本当のことを書くべきだと思い、それを書こうとした。しかし、身内の者から、今さら書いても遅い、言い訳がましくて世間は信用しない、といわれてやめにした」

以上が大西氏の証言である。

大西氏は、朝日新聞が連載した「中国の旅」以来、マスコミの報道に不信感を抱いており、当初、私のインタビュー申し込みも断った。だから大西氏のことがマスコミにのることはない。南京事件を知る上で、現在、もっとも重要な人であるが、一般になじみがないのもそのせいであろう。

しかし、南京について全然発言しないわけではない。「僧行」は旧軍人の機関誌ということで、これには書いてきた。

その「僧行」に大西氏が書いた南京について注文がつけられたことがある。

昭和五十八年四月号の「僧行」に、同じ南京攻略戦に参加した土屋正治氏が疑問を呈示したのである。土屋氏は、第九師団の少尉として光華門から南京に入った人で、土屋氏自身、虐殺は見ておらず、そう証言している。

しかし、土屋氏は、自分は第一線の戦士であり、全般的に南京を知る立場にはいなかった、巷間発表されている証言をみると、自分の知らないところで虐殺があったのではなかろうか、全般を知る立場にいた大西氏から本当のことを聞きたい、との投書になったものである。もちろん、土屋氏が投書する二か月前、大西氏は、はっきり虐殺はなかったと述べていた。

この土屋氏の質問は、現在の南京事件問題のおかれている状況を如実に示している。

戦後の軍事裁判以来、南京では大虐殺があったとされ、すでに四十年近い。その間、何度か南京大虐殺の文字が新聞におどった。土屋氏のように南京ではそれらしきことを見たこともなく、日本人がそのようなことをするはずがないと証言している人ですら、あったのではないかと疑いだし、真相に白黒がつかない状態におかれている不安から、南京では虐殺があったと証言して欲しいと思うようになっているのである。このように思うのは土屋氏ばかりであるまい。

南京事件は、今やこのようなとらえ方をされはじめている。

さて、私が大西氏にうかがうと、大西氏は質問にはっきり答えてくれた。長々と状況などを述べたりしないで、ずばりおっしゃる。思っていることは、包み隠さず述べているようにみえた。中島師団長、佐々木旅団長についての質問に、一瞬、考え込んでおられたようだが、それでもすぐに、すばっと述べられた。一瞬考え込んだのは、初対面の私に、軍

の先輩を非難するようないい方をしていいものかどうか考えられたのであろう。

そのうち、私の質問にこういうのがあった。

——当時のアメリカの雑誌に、朝香宮がアリソン領事に陳謝した、とありますが

これに対して大西氏はこう述べた。

「朝香宮がアリソン氏に会われたことはあると思いますが、陳謝ではないと思います。挨拶程度でしょう。宮さんに陳謝さすようなことは当時は考えられません。陳謝なら参謀長です」

質問している私にうむをいわせぬいい方である。

一九三八年二月七日の週刊誌「タイム」には、短いながら「朝香宮がアリソン三等書記官に陳謝した」とある。この時の状況を詳しく知りたいと思い、大西氏に質問した時の答えがこのようなものであった。

「タイム」は陳謝したといい、大西氏は挨拶だという。

その時、私は大西氏の証言に土屋氏と同じような感じをいだいた。大西氏は朝香宮をかばっているのではないか、昭和六十年の証言より、昭和十三年の証拠の方がより信憑性があるのではないか、と私は思った。整合しないと、一方をむりやり他方に合わせてしまいたくなるものである。一般に、証言より証拠を信じやすい。あった、なかった、と分れると、あった方を信じやすい。

「タイム」が間違っていたのだろうか。

このことがあってから、私は南京事件のことより朝香宮陳謝のことが気になりだし、南京事件はそのままにして、朝香宮陳謝について調べはじめた。そうするうちに、一九三八年二月一日の「タイムズ」に「日本軍の参謀が朝香宮軍司令官の名前でアリソン領事に陳謝にいたった」という記事を見つけた。こちらは「タイム」よりずっとくわしい記事である。これで真実がわかった。「タイム」の記事は、参謀が朝香宮の名前で陳謝にいったのだから、「朝香宮が陳謝した」と簡単に書いたものであった。私の疑問は氷解し、大西氏の証言が正しいことがわかった。

四十八年前の雑誌が大西氏をこう書いている。当時、南京を訪れた人が、大西氏にたずねた時の印象を述べた部分である。

「特務機関長はきびきびした若い少佐である。明快且つ穏正な意見を述べてくれる」

これを読んで、私は、四十年前も今も大西氏はかわっていないと思った。

私は大西氏から受けた印象を、気の強い人、と感じ、陸大で大西氏と同期で、大西氏をよく知る井本熊男氏（南京攻略戦当時、参謀本部作戦課員、のち東条陸軍大臣秘書官）に伝えると、井本氏は

「大西氏は御感じの如く性格の強い人ですが、立派な人格者であると思います。恰も不動明王の如く破邪顕正の意志は強烈であるが、心は仏の如く慈悲深い人です。不正は死んでも行わない。そのため他人の責任まで背負って戦犯として長年巣鴨で苦役に服し、人をして感歎せしめた人物です」

といわれた。さらに大西氏の証言を見て

「彼のいうことに嘘言はありません」

とつけ加えた。

大西氏からうかがった後、当時、南京に入城した人々をたずねると、そのうちの何人かは、南京のことなら大西氏がもっとも詳しい、大西氏のいうことなら正しい、という。こう証言するのは、松井大将付をしていた岡田尚氏と砲艦勢多の艦長寺崎隆治氏である。

ここにある大西氏の証言は、誠に貴重なものであると改めてつけ加えたい。

（続く）

電脳日本の歴史研究会
www.history.jp